

中国のアニメ・漫画映画

現代中国学部
藤森 猛

中国アニメ映画のジャンル

中国映画には一般に“故事片”（劇映画），“紀錄片”（ドキュメンタリー・記録映画），“新聞片”（ニュース映画），“科教片”（科学教育映画）があり，さらに“美術片”（アニメーション・漫画映画）を加えると5ジャンルに分類される。

またどのような素材を使用してアニメーション原画を作成するかによって，中国アニメ映画を“动画片”（セルアニメ），“木偶片”（人形アニメ），“剪纸片”（切絵アニメ），“折紙片”（折紙アニメ）に分類し，中国オリジナルの“水墨片”（水墨アニメ）や最近の“電腦动画片”（CGアニメ）を加えると6ジャンルに分類される。

伝統的アニメの継承

中国最初のアニメ映画は，1926年の『大鬧画室』（アトリエは大騒ぎ）であり，万籟鳴・万古蟾・万超塵・万滌寰の4兄弟が，中国アニメの創始期から現代に至る発展期までを常に先導してきた。彼らの目指したアニメ映画は，アメリカのフライシャー兄弟やディズニーが描いたポパイやミッキーマウスであり，世界初の長編カラーアニメである38年『白雪公主』（白雪姫）であった。またアニメ制作は，卓越したアニメーターによる緻密な手作業による芸術作品（美術作品）であったため，中国語では（広義の）アニメ映画を“美術片”と呼んだ。また中国語では，英語の“cartoon”を音訳した“卡通kǎtōng片”，“animation”を意識し

た“动画片”がそれぞれ（広義の）アニメ映画，狭義のアニメ映画（セルアニメ）の意味としても用いられる。

まず人形アニメでは，47年，方明（日本の本名：持永只仁）が撮影した『皇帝夢』（皇帝の夢）に始まり，53年に最初のカラーアニメ映画『小小英雄』（小さな英雄）が制作された。58年には“児童片”（子供向け映画）の代名詞ともなった『三毛流浪記』が人形アニメ作品となり，63年には最初の長編人形アニメ『孔雀公主』（孔雀姫）が生まれた。改革開放後の79年には『阿凡提』が制作され，81年～88年には13作の連続アニメへと生まれ変わり，中国における人形アニメの代表作となった。80年代から90年代にかけて生まれた『大盜賊』，『西遊記』，『鏡花縁』，『象鼻子』，『隱身探長』などのシリーズ作となった人形アニメ映画はいずれも中国固有の物語を素材にしている。また背景や人物描写は簡素であるのと同時にセリフが少なく，一方で民族的な音楽が全編を流れ，伝統的な人形アニメの形式を継承している。

また折紙で作った動物などのキャラクターを画面上に構成して制作する折紙アニメは，60年『聰明的鴨子』（かしこいアヒル）に始まった。80年代以降では，80年『小鴨呷呷』（アヒルがあがあ），88年『藍骨』（青い骨）など作品数は最も少ないものの，幼児向けアニメとして作品が定着した。作品としては動物の親子をテーマとする物語であり，幼児・児童による合唱曲が用いられる。

一方，水墨アニメ映画は，中国で最も芸術性やオリジナル性が高いと言われる。最初の作品は60年の『小蝌蚪找媽媽』（おかあさんを探すオタマジャクシ）であり，“水墨动画片”（水墨セルアニメ）として生まれた。63年『牧笛』は齊白石の水墨画が背景に用いられ，水墨アニメが国際的な評価を得た。80年以降は『鹿鈴』，『鸚鵡相爭』，『山水情』，『蘭花花』，『雁陣』，『雪鹿』などの名作を生んでいる。水墨アニメも中国の伝統的な物語を素材とし，動物や子供の心のふれあいをテーマに作品が構成され，人物の輪郭が背景の水墨画である風景画の中に溶け込んでいる。登場人物のセリ

フはほとんどみられないが、民族楽器を多用した伝統音楽が全編に流れている。

新たなアニメの模索

アニメジャンルのうち、切絵アニメ（剪纸アニメ）では、1958年に『猪八戒喫西瓜』（猪八戒スイカを食う）が生まれ、万4兄弟の一人である万古蟾によって、『漁童』、『济公鬧蟋蟀』、『人参娃娃』、『金色的海螺』などの作品が次々と制作された。また80年代前半までに『猿子擲月』、『淘气的金絲猴』、『火童』、『水鹿』などの作品が作られ、いずれも人形アニメや水墨アニメと共通する中国固有の伝統アニメの性格をもっていた。

ところが80年代半ばから90年代になると、家電製品の中でテレビの普及が急速に進む中で、『鉄臂阿童木』（鉄腕アトム）、『一休』（一休さん）、『機器猫』（ドラえもん）、『奥特曼』（ウルトラマン）などのテレビドラマ・コミックが日本から流入し、中国において社会現象を引き起こすようになった。切絵アニメにおいては、86年から13作の連続アニメ『葫蘆兄弟』（ひょうたん兄弟）が制作され、興行的にも成功を収め、90年代の『葫蘆小金剛』（ひょうたん金剛）などのヒットに引き継がれた。これらの作品は、基本的なストーリー展開が中国固有の物語ではあるものの、日本の「アトム」・「ヤッターマン」・「ウルトラマン」シリーズや少女漫画、あるいはジャッキーチェンに代表される香港カンフー映画などの影響を強く受けている。キャラクターの動作や物語のテンポが非常に速くなり、ストーリーが神話的なものから現代的かつコミカルなものへと変化している。

またアニメ映画の主流であるセルアニメについては、文革以後、79年『哪吒鬧海』（ナージャ海を騒がす）で復活を遂げた。また86年までは“上海美術電影製片廠”（上海アニメ映画製作所）が独占的にアニメ映画を制作してきたが、87年には長春映画制作所によって『鷹』が作られた。93年以後はアニメ映画も正式に市場で売買されるようになり、競争化が進んでいる。セルアニメ作品としては、日本アニメの影響を最も強く受け、80年

代半ばから現代ものセルアニメが多く制作されている。その中でも、84年から制作された連続アニメ『黒猫警長』シリーズは、90年代を通して大ヒットを続け、同時に様々なキャラクター商品などの販売も進んだ。

99年には、大型セルアニメ映画『宝蓮灯』が制作され、作品には手塚治虫や松本零二の作品の影響がみられている。また90年代後半以後、宮崎駿の『風之谷』（風の谷のナウシカ）、『魔法公主』（もののけ姫）、『千と千尋』（千と千尋の神隠し）などのアニメ映画作品が中国にも紹介され、さらに青少年向けに『GTO』や『箏球飛人』（スラムダンク）などのコミック本が流通するようになった。こうして中国の青少年は従来から中国アニメーション映画のキャラクターに描かれていたヒーロー像には満足できなくなってきたといわれる。

中国アニメも60年代以降の作品であれば、VC D・DVD・ビデオ等で入手できるようになったので、この機会に観賞をすすめたい。



中国アニメ・コミック展のにぎわい（上海市）